

郷土の歴史に興味・関心をもたせるための、地域素材を生かした指導法の工夫

— 伊波式土器、萩堂式土器、大山式土器を通して —

目 次

I	テーマ設定の理由	101
II	研究の仮説	101
III	研究の全体構想図	102
IV	研究の内容	103
1	はじめに	103
2	沖縄諸島における爪形文土器・曾畑式土器発見の意義	103
3	伊波式土器・萩堂式土器・大山式土器の時代の位置づけと器形・施文・貝塚の把握	104
4	九州縄文土器の発見が沖縄の土器編年に与えた影響の研究	110
5	「琉球史ノート」づくりの方針	113
V	授業実践	114
1	日 時	114
2	単元名	114
3	単元について	114
4	単元全体の学習計画	115
5	生徒の学習の実態	116
6	本時の指導	118
VI	研究の成果と今後の課題	120
1	研究の成果	120
2	今後の課題	120
	〈主な参考資料〉	120

宜野湾市立真志喜中学校

仲 里 勉

郷土の歴史に興味・関心をもたせるための、地域素材を生かした指導法の工夫 — 伊波式土器、萩堂式土器、大山式土器を通して —

宜野湾市立真志喜中学校 教諭 仲 里 勉

I テーマ設定の理由

現代は地域の時代といわれる。しかし、歴史学習の中で縄文時代という設定が何の疑いもなく日本全土で通用している。だが白木原和美氏の説によると「混じりけのない縄文文化が日本全土を均一に覆ったことは一度もないし、九州在来の土器は縄文技法を用いない」のである。また、宮古・八重山の先史文化は東南アジアや台湾から北上した文化であるといわれており、縄文文化の圏外にある。このように日本の地域文化の独自性は様々な様相を呈して今日に至っている。

沖縄諸島以南の歴史には本土の弥生、古墳、奈良、平安時代に相応する時代区分はない。それを1000年に及ぶ空白（停滞）の時代という見方があるが、果たしてそうだろうか。爪形文土器の流入に始まり伊波式、萩堂式、大山式土器を創りあげた沖縄の人々は、来たるべきグスク時代に至るまで営々とその素朴な生活を営み続け、やがてアジアに冠たる大交易国家として発展していくのである。

そこで本土の縄文後期に位置する伊波式・萩堂式・大山式土器に関する資料を収集し、先史時代の郷土の人々の生活の様子を子供達に伝えたい。

これまでの授業を反省してみると、現在の時間枠の中で琉球史に多くの時間を割り当てることはできなかった。又、為朝伝説に始まる従来の非科学的な学習では子供達が関心を示さないばかりか自分達の郷土の歴史に誇りと自信を持たせることができなかった。

上記の反省から次のような問題点がでてきた。

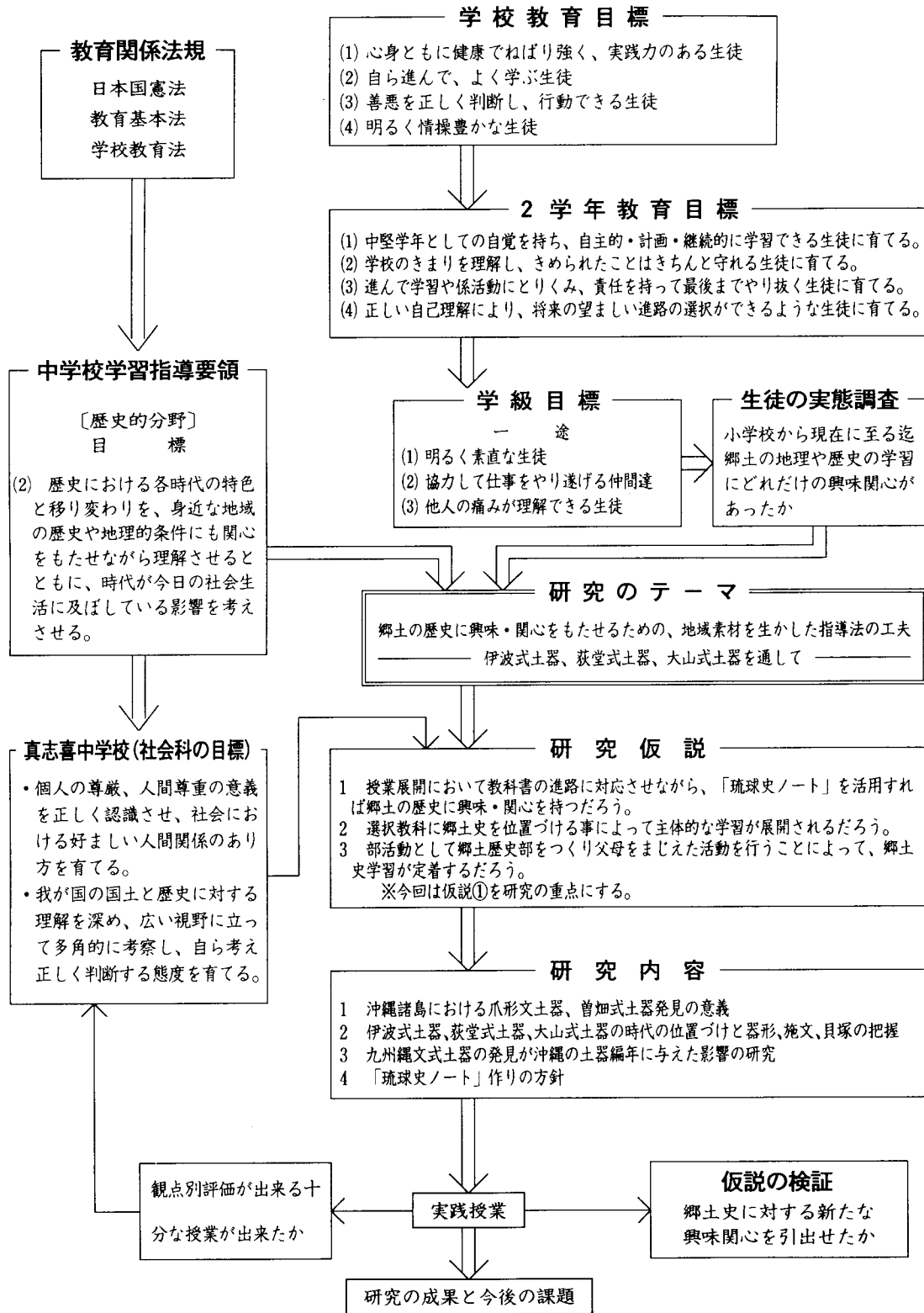
- 1 実証的史実となり得ない伝説や伝承による授業が多かった。
- 2 高校入試のための断片的な授業になりやすかった。
- 3 自分達をとりまく島嶼環境から生まれた沖縄独自の歴史を地理的特性の面から十分理解させることができなかった。

以上の反省と問題点を踏まえて仮説を設定した。

II 研究仮説

- 1 授業展開時において教科書の進路に対応させながら、「琉球史ノート」を活用すれば郷土の歴史に興味・関心を持つだろう。
- 2 選択教科に郷土史を位置づける事によって主体的な学習が展開されるだろう。
- 3 部活動として郷土歴史部をつくり父母をまじえた活動を行うことによって、郷土史学習が定着するだろう。

III 研究の全体構想図



IV 研究の内容

1 はじめに

琉球史を教科書の進路に対応させながら先史時代から現代までを通史として取り扱うために5分間の琉球史学習を継続実践したい。又、年間10時間程度の特設授業を設けて各時代のまとめもしなければならない。この限られた時間枠の中では教師の豊富な資料の提示がなければ5分間の学習は散漫になるだろう。まして板書は不可能に近い。配布された資料を如何に「琉球史ノート」としてまとめていくかである。そこで、本研究をするにあたり、研究内容を項目ごとに記述した上で、順次、資料を掲載する事とした。

2 沖縄諸島における爪形文土器・曾畑式土器発見の意義

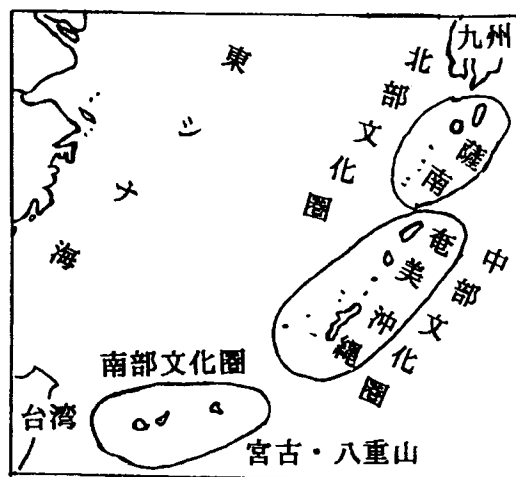
種子島から与那国島に到る1200kmの洋上に連なる琉球列島は、通常三つの文化圏に分けてその特性を把握する事が出来る。

縄文時代から奈良・平安を通じて絶えず九州文化圏の中に組み込まれていた薩南諸島の北部文化圏。九州縄文文化の影響下にありながら、独自の土器文化を創り上げていった沖縄・奄美諸島の中部文化圏。縄文文化の圏外にあって東南アジアの先史文化を継承した宮古・八重山諸島の南部文化圏である。

1975年読谷村渡具知東原における爪形文土器、曾畑式土器の発見は、それまで沖縄の土器が九州縄文土器の影響下にあるだろうという予測はたてられていても、その系統を明かにする事が出来ないまま独自の編年を余儀なくされていた沖縄考古学界にとって、まさに画期的な出来事であった。九州から東北地方にかけて広く全国的に分布する縄文時代草創期の爪形文土器、九州を代表する前期の曾畑式土器の発見は、沖縄諸島の土器がまぎれもなく、九州本土の系統に属する事を証明したばかりでなく、沖縄の歴史を一挙に3000年も遡らせたのである。

しかし、上記土器発見の意義はそれだけにとどまらない、もっと重要な問題を内包している。梅原猛氏は伊波普猷氏を批判して言う。「九州地方において権力争いに負れた隼人の一部隊が沖縄にやって来て、国をつくったに違いない。伊波はそう確信し、彼はこの稲作の道を追究しようとするのである。このまことに執拗きわまる稲作の道の追究は、彼の努力と誠意にもかかわらず、成功していないように思われる」と言い、「あの苦悩と混迷に満ちた稲作の道の追究は、沖縄人としての伊波には決しておろそかにできない、自己の存在の根底にかかわる問題でもあったのであろう」と同情を示しつつも、「稲作農民にあらざれば日本人ではないという抜きがたい偏見がありそれが沖縄文化の正しい見方を妨げている」として、日本と沖縄を結ぶ接点は縄文文化にもとめるべきで

図1 南島文化圏



「南島先史時代の研究」1972より

あり、それこそが沖縄文化の基層であるとした。この明快な論旨は爪形文土器の発見によって九州と沖縄の往来が6000年以上もまえにさかのぼるという驚くべき事実の故に説得力を持つのである。

3 伊波式土器・荻堂式土器・大山式土器の時代の位置づけと器形・施文・貝塚の把握。

渡具知東原遺跡で爪形文土器、曾畑式土器が発見される1975(昭和50)年まで沖縄最古の土器は本土の縄文後期相当(4000年-3000年前)に位置づけられる上記3型式の土器であると考えられ古い順に荻堂式-伊波式-大山式土器とされて来た。しかし1976年沖縄市室川貝塚の発掘調査によって荻堂式土器出土層の下層から伊波式土器が出土するに及んでその位置関係は逆転し、むしろその事によって伊波式-荻堂式-大山式土器の流れがスムーズに説明出来るようになったと高宮廣衛氏は言う。なお、室川貝塚最下層から発見された新種の土器は室川下層式土器と標式名を与えられ曾畑式土器に先行する初の南島土器ではないかと期待がもたれている。

※ 先ず一般的理解を助けるために土器の各部名称・形態を図示しておく。

図2 土器の各部名称

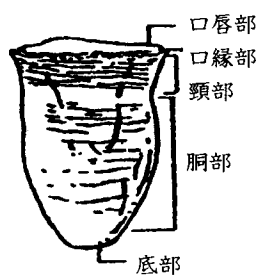


図3 土器の形態

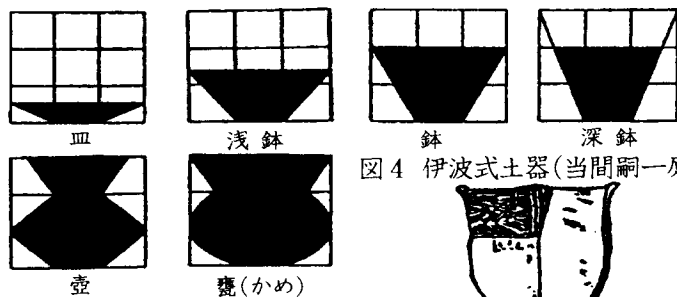


図4 伊波式土器(当間嗣一原図)



※ 土器の器形を合理的によび分けると、口が大きくひろく器のうち、高さが口径の三分の一未満のものを「皿」、三分の一ないし二分の一未満のものを「浅鉢」、二分の一ないし三分の二未満のものを「鉢」、三分の二以上のものを「深鉢」と称する。また口径が胴径の三分の一以下のものを「壺」、頭部がしまり、口径と胴径がほぼ同じ大きさのものを「甕」と称する。これらの区分は、あくまでも便宜的なものである。(「沖縄県の考古資料(土器)目録」の「土器について」知念勇 著述)

(1) 伊波貝塚と伊波式土器

伊波貝塚は1904年(明治37)鳥居龍藏氏によって発見された。その後1920年(大正9)に大山柏氏による発掘調査が行われその成果は「琉球伊波貝塚発掘報告」としてまとめられた。

貝塚は金武湾を見おろす琉球石灰岩丘陵上にある伊波城跡の、東側崖下に位置する国指定史跡である。

「豊富な貝類・魚骨・ジュゴン・イノシシなどの遺物に混じって土器・石器・骨器・貝器などが出土する」(「沖縄大百科事典」-沖縄タイムス社)

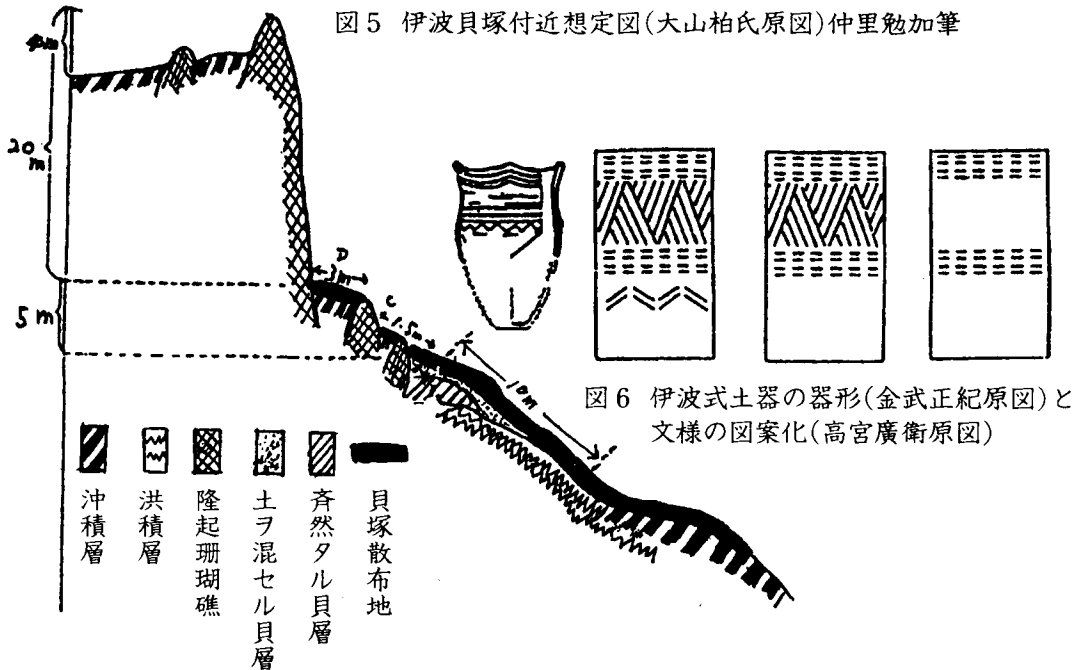


図5 伊波貝塚付近想定図(大山柏氏原図)仲里勉加筆

図6 伊波式土器の器形(金武正紀原図)と文様の圖案化(高宮廣衛原図)

① 伊波式土器の器形と文様

伊波式土器の器形は平底の深鉢形である。この形は荻堂式・大山式にも共通するが「伊波式においては口径は普通、胴の最大径より大きい。これは頸部における頸の最小がどこに来るかによって決定される。すなわち伊波式では図4にみられるように頸部の最小径は頸の中央部から下半部にくるのが一般的で従って土器を正面からみると底部から口縁へ向けて開く形を取り胴上部(頸と胴の境目)でわずかにふくらみ頸部中央か下半部で多少しまりそして口縁へ緩やかに外反するという、いわば朝顔形の器形ということが出来る」(「先史古代の沖縄」—高宮廣衛著)。口縁部に関していえば通常4個の山形突起を持つ波状口縁である。

以上の様な外見的特徴を持つ器面にはさらに判断の決め手となる数種の文様を施す。施文具には工具の先端を5mm間隔ほどの二又にした又状工具、竹を截ち割った半截竹管工具、単篋工具を用いる。文様は口唇部及び頸部に施され胴部に施す事はない。図6に示したように頸部の上下に又状工具を用いて二条一組の二組づつを施文し中央を幾何学的な羽状文で埋める三段構成が普通であるが、四段構成にして下部に鋸歯文を施したり、あるいは中央を無文のまま放置するなどのバリエーションがある。

なお、又状工具による上下の平行線文は点刻文とよび、点と点がつながる事はなく必ず対になって横に走るが、まれに山形突起の下を縦に降りるものもある。

② 伊波貝塚人の住居

それでは、伊波貝塚を残した人々は何処に住居を構えていたのだろうか、北面する貝塚付近ではありえない。強い北風を受ける場所を選ぶ理由は考えられないから

である。とすれば、崖上の開地(オープンサイト)、伊波の集落や伊波小学校辺りではなかろうか。事実、隣接する古我地原貝塚では「崖上の台地が居住空間、崖下が捨て場と判明しているし」(「日本の古代遺跡47沖繩」より)伊波貝塚と同時代の遺跡である。今から3500年も前、海岸線は石川平野の奥深くまで入りこんでいた。目の前に広がる海の幸を求めて伊波貝塚人は崖上と崖下を往復し多量の魚介類を持ち帰り、残った骨や貝殻を崖下に投げ捨てたに違いないのである。

(2) 荻堂貝塚と荻堂式土器

荻堂貝塚は北中城村荻道の琉球石灰岩台地の崖下に所在する縄文時代後期(4000-3000年前)の遺跡である。1904年(明治37)に伊波貝塚と同じく鳥居龍蔵氏によって発見され、1919年(大正8)松村瞭氏によって本格的発掘調査が行われた。大山柏氏の伊波貝塚発掘のわずか1年前である。その発掘成果は松村氏の深い洞察力と格調の高い文章によって「琉球荻堂貝塚」としてまとめられ、考古学の古典的名著のひとつとなった。まずは、ひとつの様式を確立した荻堂式土器を見ていくことにする。

① 荻堂式土器の器形と文様 図7 荻堂式土器の器形(沖国大原図)と

器形は平底の深鉢形で口縁は四個の山形突起を持つ波状口縁であり、伊波式土器と共通する。胴の最大径が胴上部(頸と胴の境目)に来ることも同じであるが、ここから口縁にかけて徐々にすぼまって行き、頸の最短は

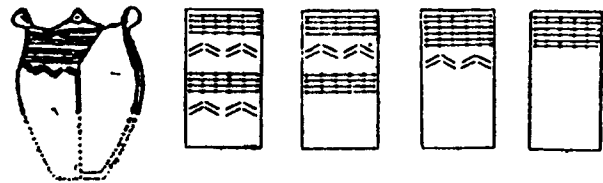
口縁真下に来る。従って荻堂式に於いては口径が常に胴の最大径より短い、同じ程の長さであり口径が胴径より長くなる事はない。この最短の頸部から四個の山形突起が外反するので、薔薇の蕾が開き始めたような印象を受ける。

次に四個の山形突起を見よう。伊波式では胴部から朝顔状に外反する口縁までの器面の厚さは同じであるが、荻堂式では山形突起の外面に瘤状の粘土の塊りを押し付ける。これが荻堂式の最大の特徴であり、高宮廣衛氏は口縁部の破片を識別する材料に成り得ると、明快な判断基準を示した。

別に、波状を示さない平口縁に直接山形突起を載せる場合もあり、この形はやがて山形突起を全部取り除いた、大山式土器へ移行するのであろう、と言われている。

最後に文様であるが、施文具に叉状工具、半截竹管工具、単篋工具を用いて頸部から口縁、口唇部にかけて施文し、胴部に及ばないことは、これも伊波式と同様である叉状工具を器面に押し当てて、先ず点の文様をつくり、少し抜くようにしながら、それでも工具を器面から離さずに横にすべって、次の点へと向かう。結果として点と点を細い線で結んだ様な連点文が出来上がる。この連点文の下に鋸歯文(ギザギザの文様)を施す二段構成が荻堂式の一般的な文様構成である。勿論、連点が

文様の図案化(高宮廣衛原図)



短沈線や長沈線になったり、一段から四段までの文様構成があるなど、様々なバリエーションが認められる事は言うまでもない。

松村瞭(アキラ)は本貝塚出土の土器に「琉球式」の名称を与えたが、彼の炯眼は、すでにこの土器の出自の本質を見抜いていた。「琉球式土器ハ我が石器時代ノ後期ニ属スベキモノナルト同時ニ何時ノ頃ニカ内地ヨリ押サレ押サレテ彼ノ遠島ニ流込ミタル者ノ遺留シタルモノト云フ」べき土器であり、真正なる縄文は認められないが「人為的ニ之ヲ模倣シタリト思ハルル模倣縄文ト稱スベキモノハ之ヲ見ルヲ得ベク、…… 点線式彫紋ハ即チ是レナリトス」(「琉球荻堂貝塚」より)として、本土の縄文が流れ流れて、一見縄文とは見えない南海の変種を創りだしたと喝破した。

② 荻堂貝塚

「石灰岩丘陵の北縁崖下に形成され、表土・混貝土層・基盤(石灰岩)の3層からなり、豊富な海産貝とともに陸産マイマイ(シユリマイマイ)も著量検出された松村はマイマイ類のうち出土量の多いものは食用に供されたと考えた。

哺乳類ではイノシシがもっとも多かったが、ジュゴンや犬の骨なども注目された。人工遺物には土器・石器・貝製品・骨器がある。…… 石器では磨製石斧・石槌・凹石、骨器では大小の骨針のほか骨銛、貝器では貝小刀・貝包丁・貝匙・貝皿等の出土をみた。とくに装身具は豊富で、貝製では垂飾・玉類・二枚貝や巻貝を利用した貝輪などがあり、骨製ではサメの脊椎骨の臼状中央部に1孔を穿ち、赤色顔料を塗布した製品等も検出された。…… 施政権返還時の1972年5月、国指定の史跡となる」(「沖縄大百科事典」)。

③ 荻堂貝塚人の生活

荻道(現在は道の字を使う)から熱田の海岸まで直線距離にして1200mあるが荻堂貝塚人の頃は和仁屋・熱田は丘陵の近くまで海が入り込んでいたはずだから、内陸にあるように見えて、実際には1kmに満たない先の海の幸を取り込んでいたのである。

それを貝塚の出土遺物はよく物語っている。サメやジュゴンを捕獲するほどの技術とその骨を加工して再利用する知恵を持っていたのである。イノシシはすでに家畜化した犬を使って追いつめ、仕掛罠を作って捕らえたのであろう。石鏃の出土を見ないから、弓矢はまだ普及してなかったと考えられる。

(3) 大山貝塚と大山式土器

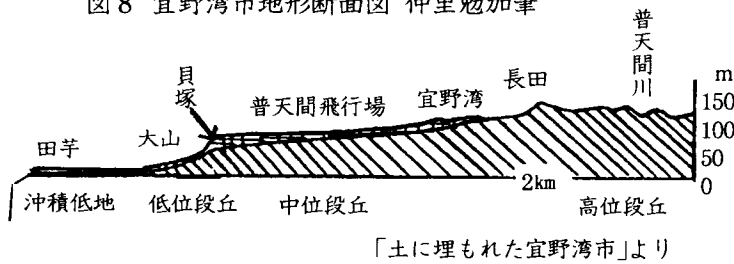
大山貝塚は1954年(昭和29)に、多和田真淳氏によって発見され、1958年(昭和33)に多和田氏と賀川光夫氏が発掘調査を行った、縄文時代後期も終りに位置づけられる遺跡である。出土した土器は多和田氏によって、沖縄先史土器偏年の一時代を画する大山式土器の名称が与えられた。

① 大山貝塚の立地場所

宜野湾市は市全体が、四段を構成する典型的な海岸段丘の上に発達した街である。

東シナ海を右にみながら、国道58号線を南下すると大山洞人の発見された伊佐を経て間もなく大山の集落にさしかかる。第一大山バス停で下車し、その手前の孔雀楼から道を左に折れ、大山の古い集落を縫って坂道を登ると、やがて正面に国指定史跡「大山貝塚」の石碑が見えてくる。その石碑の背後にある小高い石灰岩丘陵上に大山貝塚は位置する。段丘が標高10m-30mの低位段丘から一気に50m-80mの中位段丘に登りつめた場所であり東はそのまま普天間飛行場へと続いている。貝塚は、ミスクムイと呼ばれる大山集落の昔からの拜所でもある。この拜所を挟んで丘陵は南と北側にテラスを形成している。大山式土器は、このテラスから出土した。

図8 宜野湾市地形断面図 仲里勉加筆



「土に埋もれた宜野湾市」より

図9 ミスクムイ拜所



(仲里勉原図)

② 大山式土器の器形と文様

大山式土器の器形は平底深鉢形と言う点では伊波式、萩堂式土器と同じである。しかし、大山式土器の口縁部は平口縁であり、前二者が4個の山形突起を持つ波状口縁である事から、一見して区別出来る。胴部が幾分膨らむタイプと、平底から口縁にかけて直線的に開くタイプがあり、後者は胴上部に凸帯を貼り付けるものが知られている文様は頸部に三条の横捺刻文や押し文を施し、施文具には先端が5mm幅程度の単篋工具を用いるのが特徴である。伊波式・萩堂式に比べ器形、文様ともスマート化、単純化して行くのは時代の流れでもあったのだろうか。

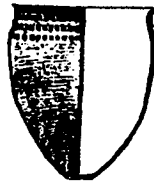
終末の室川式土器(室川下層式と上層式の間位置する)へと、その伝統は受け継がれて行く。

図10 文様の図案化



(高宮廣衛原図)

図11 大山式土器



「土に埋もれた宜野湾市」より

図12 凸帯のついた大山式土器

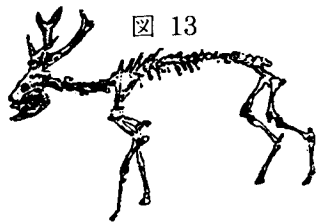


(仲里勉模写)

③ 大山貝塚

「…骨角器が数点検出されているが、注目されるのは冠部と身部に分別される有孔尖頭器である。冠部に円孔を有する長さ16.5cmの骨製品で(現今の琉球婦人がジーファと称して髪を止め、髪を飾るピンに類似形態のものとして)ヘアピンを想定した。…ほかに骨針、サメ歯製垂飾なども検出されている」(「沖縄大百科事典」)
大山貝塚からは鹿骨製のペンダントと思われる遺物も出土して、物議をかました。

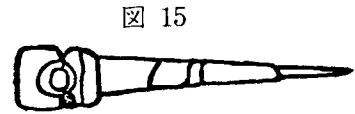
いわゆる、リュウキュウジカ・リュウキュウムカシキョンと呼ばれる鹿の仲間は2万年前に絶滅したという定説に対して、大山貝塚出土の上記鹿骨製品を取り上げ、貝塚相当期の3500年以前まで棲息していたという反論であるが、これは少しむりであろう。やはり、大山貝塚のペンダントは外部(九州)からの持ち込みと見た方が、他に鹿骨製品が出土しない状況から見て妥当の様に思われる。



頭胴長(約88cm)体高(53cm)尻尾(17cm)
リュウキュウジカの骨格
(仲里勉模写)



長さ(12cm)
大山貝塚出土の鹿骨製
ペンダント(仲里勉模写)



長さ(16.5cm)
大山貝塚出土の骨製ヘアピン
(多和田真淳・賀川光男)
「大山貝塚調査概報」より

④ 九州との交流

九州との交流はどうであったか。真志喜安座間原第一遺跡の発掘は、それに明快な答を与えてくれそうであり、結論から言えば、九州との交流はあったのであろう。残念ながら正式な報告書が出てない以上、断定は出来ない。以下は私の想像である。安座間原をキャンプ地として大山貝塚人は絶えず眼前の豊かな干瀬を歩きまわりその豊かな恩恵に浴していた。イノーでは独木舟をあやつり、骨製の針を使ってグルクンやイラブチャーを釣り上げた事だろう。時には石斧の材料となるチャートを求めて本部半島や伊江島に漕ぎ出さねばならない。それがいつの頃であるかは、風や潮の具合を知悉していた彼らにとっては自明の事であった。冬になると海辺の北風は冷たい。キャンプ地を引き揚げて、洞穴のある本来の住居へ帰っていったのである。

時は悠久の如く流れていたが、そういう彼らの生活を動転させるような出来ごとが起こった。ある日、見なれない人々が牧港の入り江深く入り込み、上陸したかと思うと、浦添丘陵の一角に住居を営み始めたのである。新参者の彼らは全く新し土器を携え、幾度となく水平線の彼方に消えては、帰って来た。彼らの住まいが浦添貝塚のすぐ横にある洞穴(現在の高御墓)であり、彼らこそ九州から奄美、沖縄へと活発な海上交易を行った市来式土器人であった。市来式土器は後期前半に現れた九州土器であり浦添貝塚は沖縄における唯一の出土地である。但し大山貝塚と浦添貝塚には時間的なずれがある。今後、両貝塚を結び付ける遺跡の発見に期待したい。

(4) まとめ

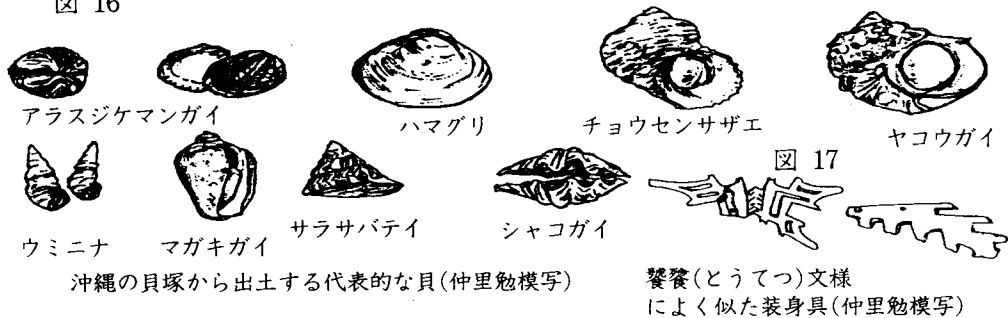
以上、3型式の土器と、その出土貝塚を概観した。縄文後期(4000年-3000年前)の1000年間に相当するこの時期の貝塚は明治37年の鳥居龍蔵の発見試掘に始まり、沖縄考古学上、最も研究期間が長く、そのために3型式の標式土器を得て、人々によく知られた貝塚である。なお、この時代に特徴的な、もうひとつの出土遺物がある。中国

殷の時代(3600年前)の青銅器に施された、饗饗(とうてつ)文様によく似た装身具であり、当時すでに中国との交流があった事をうかがわせる。

上記、3型式の土器を九州縄文時代後期(4000—3000年前)に位置づけたが、なおくわしく言えば後期も後半(3500年前)である。この時期の区分は層位に基づいた相対的区分であり、科学的根拠に基づいた絶対編年ではない。沖縄先史時代の編年は、流動的であり、今後の新資料の発見によっては大幅な変更も有り得る。

最後に饗饗文様の装飾品と沖縄の貝塚から例外なくと言ってよいほど出土する、代表的な貝類を上げておく。

図 16



4 九州縄文土器の発見が沖縄の土器編年に与えた影響の研究

(1) 多和田編年

戦前、本土の学者によって先鞭がつけられた沖縄の考古学を、戦後も継続して受け継ぎ、その研究に生涯を捧げた先達は多和田真淳氏である。現在の沖縄考古学の活況は多和田氏の努力に負うところが大きい。氏は「文化財要覧1956年版」「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」で「多和田編年」を提唱し、以後の考古学はこの編年のもとに研究が進められた。

「多和田編年」は沖縄の新石器時代を「貝塚時代」と捉え、それを四期に区分した前期(伊波式・荻堂式・大山式土器)—中期(宇佐浜式土器※九州縄文晩期相当)—後期(弥生—平安時代相当)—晩期(グスク時代)が、それである。しかし、グスク時代はひとつの時代を画する歴史(原史)時代であるとされ、結果として三期区分が確立した。

(2) 現行編年

ところが、1975—76年の読谷村渡具知東原の発掘調査において爪形文土器、曾畑式土器の出土が確認されると、これまで最古とされていた伊波式系列の土器から3000年も遡る爪形文土器を「多和田編年」に位置づける事が不可能になった。

そこで、この問題を解決するために「前期」の前に、新しく「早期」を設定したのが「現行編年」である。

しかし、この編年は応急処置の感があり、九州縄文土器との対比のうえからも最初から問題を抱え込むことになる。

(3) 空白の南島縄文時代中期

上記爪形文土器は福岡県門田(もんでん)遺跡出土のそれに類似するといわれるが、

両者の間には4000年に及ぶ時間的へだたりがある。門田遺跡からは文字通り、縄文時代草創期の1万1000年前の年代が得られたのに対し、渡具知東原では放射性炭素14法による測定の結果6450年±140 B Pの結果が得られたのである。この科学的な年代を裏付ける事は地質学の上からも可能である。

佐多岬南西の海底鬼界カルデラが大爆発を起こしたのは6300～6500年前である事は炭素14年法の結果分かっている。その際の堆積火山灰を「アカホヤ」と呼ぶが、奄美大島笠利町の喜子川遺跡において、このアカホヤの上から爪形文土器が出土した。従って、南島の爪形文土器は上記年代以前に遡る事は有り得ない事になる。では4000年の時間差をどう見るか。以下、高宮廣衛氏の説を要約する。

「沖縄・奄美の爪形文土器は九州爪形文文化の下限を示すものであり、今後もっと古い土器発見の可能性は十分に有り得る」とする。事実、野国貝塚B地点では、それらしい土器も見つかっている。

なお、文化の下限とは、例えば北海道には弥生文化は伝わらなかったため、弥生相当期を「続縄文」と位置づけて、縄文時代が連続発展していたと言う事である。

※ 放射性炭素14法→生物が活着している間は、つねに空気中の炭素14が補給されているので、生物体中の炭素14濃度は空気中の炭素14濃度とほぼ等しい。しかし、生物の死滅後は新たな炭素14補給はおこなわれなくなり、生物遺体中の炭素14は一定の速度をもって崩壊し、その速度は5730年をもって半減する。そこで、遺跡から出土した生物遺体中の炭素14濃度と、現存する生物の炭素14濃度を比較すればその生物遺体の死滅時が逆算できる。（「日本考古学を学ぶ(1)」有斐閣選書）

※ B P→before the presentの略。1950年を基準としてそれ以前の年代を言う。考古学ではB C(紀元前)表記は殆ど用いない。今から何年前という言い方が普通である。

4000年の間隙があるとはいえ、沖縄の土器文化は九州縄文文化の影響下に形成された事は間違いなく早期末から前期(6500～5000年前)にかけては、九州一円という文化圏の中に南島をふくめてもよいだろう。

ところが、中期(5000～4000年前)になると、突如として南島に空白の時間帯が広がる。九州土器の南下はおろか、沖縄諸島の遺跡、遺物すら何ひとつ見つからないのである。縄文中期といえば、中部地方から北陸、東北地方にかけて、馬高式(新潟)の火炎土器。勝坂式(関東西部から山梨、長野)、阿玉台式(北関東から新潟)等、複雑怪奇な文様を持つ様々な土器が出そろう時期であり、まさに縄文文化の爛熟期である。にもかかわらず、やはり九州全土においても中期の遺跡形成は希薄になる。大隅諸島にいたっては全く無人化したと言う説もある。

原因は前述の喜界カルデラの大爆発とそれに続く中期、阿蘇山の活動による多量降灰、その他の火山活動の激化にあったといわれている。そうであるならば、九州系土

器の南下がなかった事の説明にはなるが、沖縄から遺跡が消えた事の説明にはならない。

高宮氏は「沖縄は火山活動とは無縁であるから、無人化したはずはない。中期の遺跡は、まだ陽の当たらない場所で我々の発掘を待っている」と言う趣旨のことを書かれていると思うが、どうだろう。最近の研究成果によると、奄美系の面縄前庭式や伊是名具志川島の具志川式土器が、長年謎とされていた中期の土器として位置づけられるようになったと言う。この九州土器の影響をうけない面縄前庭式、具志川式土器から南島文化の個性化は始まり、後続する伊波・荻堂・大山式で沖縄諸島のみ分布する独自の土器文化が確立した。後期は既述の如く、九州の市来式土器が出土し沖縄が再び九州文化圏と接触を持つ時期である。ここで少しばかり疑問を呈しておきたい。私は上記九州の自然災害が沖縄に如何なる災害の余波も及ぼす事はなかったとは、言い切れないと思う。沖縄が無人化したと言うのではなく、この天変地異には、現在に続く沖縄の基層文化を規定する非常に重要な、歴史的事実が隠されているのではなからうか。だが、これについて私見を述べる程の見識が私にはない。

(4) 高宮暫定編年

表1 高宮暫定編年

今後、縄文中期の九州系土器が発見される様なれば、現行編年は根底から崩れ去る事になる。新しい考古編年は急務の課題であり、様々な提案がなされている。その中で、現在最も注目されているのが高宮廣衛氏による「高宮暫定編年」である。

この編年によれば従来「貝塚時代」とされていた時期を新石器時代と捉えそれを前期(I・II・III・IV・V・VI)後期(I・II・III・IV)に区分し、なお前期を縄文時代に、後期III迄を弥生時代に対応させた。

しかし、この編年は次の点で吟味が必要であると安里進氏は言う。沖縄には縄文・弥生の影響以外に中国等の影響もみられる。土器以外に言えば、むしろ沖縄文化は本土との差異の方が目に付く。弥生時代に付いても水田耕作の可能性は否定的な状況証拠が多いのに、機械的に沖縄編年を本土の編年に対応させるのは如何なものか。

九州	暫定編年	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の年代資料	現行編年
縄文時代	前期 I	ヤブチ式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6,670±140Y.B.P	早期
		東原式土器		東原式 6,450±140Y.B.P	
	後期 II	室川下層式土器	曾加式土器 条痕文土器	曾加式(渡具知東原) 4,880±130Y.B.P	中期
		曾加式土器			
		条痕文土器			
後期 III	具志川式土器	面縄前庭式土器		前期	
	神野C式土器				
後期 IV	神野D式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3,370±80Y.B.P 伊波式(室川) 3,600±90Y.B.P	前期	
	神野B式土器				
後期 V	伊波式土器			宇佐浜式は黒川式 並行とみられる	中期
	荻堂式土器				
後期 VI	大山式土器				後期
	室川式土器				
弥生時代	前期 I	室川上層式土器	板付II式土器 亀ノ甲類似土器		後期
		宇佐浜式土器			
	後期 II	仲原式土器	山ノ口式土器		
		真栄里式土器			
後期 III	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は中津野式並行とみられる		
	アサギ式土器				
古墳時代 平安時代	後期 IV	フェンサ下層式土器		類似患器	後期
		アサギ式土器			

注「フェンサ下層式土器はグスク時代初期」とする見解もある。

「日本の古代遺跡47沖縄」より

5 「琉球史ノート」づくりの方針

年間140時間の二年生歴史、履修課程において、毎時5分間の琉球史枠を設定すると50分授業の14時間が確保できる。さらに、特設授業10時間を加えると、計24時間の琉球史学習が可能となる。これだけの時間があれば、先史時代から現代までの通史はカバー出来る。問題は細分化した5分間をどう使うかだが、板書は不可能である。教師が時間毎にどれだけの資料を提示出来るかにかかっている。資料を中心に問答形式で授業を進めていく事になる。5分間の積み重ねで50分、一時間を終了した時点で、まとめとしての板書をする。もし、5分間の学習が教師の説明に終始すれば、子供たちは、興味・関心を示さないばかり、本来の学習にも支障を来すだろう。気がかりは、受け取った資料を「琉球史ノート」に如何に整理してくれるかである。授業時にそこまでのゆとりはないから、宿題になる。観点別の評価が必要なゆえんである。県立博物館発行の「ノート」もあるが、あくまでも自主作成による「琉球史ノート」を完成させたい。

以下、具体的に5分間積み重ねの50分授業にどういう資料が必要で、板書はどのようにするかを試案として提示したい。

授業は一時間取扱いの「沖縄の旧石器時代」である。

沖縄の旧石器時代(板書事項)

1 沖縄から出土した旧石器時代の人骨

山下洞穴…32000年前(那覇市山下町)幼児(女子)の大腿骨

港川人…18000年前(具志頭村港川…粟石採石場)男性2体・女性3体

中国広西省の柳江人に近い形態

石器、その他の道具が出土しない。

大山洞穴…20歳前後の男性の下顎骨が出土、年代は不明

下地原洞穴人(乳児骨…久米島) ピンザアブ人(宮古人)

2 沖縄旧石器文化の特徴

打製石器が出土しない…文化とは呼べないとする説もある。

鹿の骨を利用した骨角器文化

3 沖縄旧石器時代研究の始まり

1936年(昭和11)徳永重康が鹿化石を発見…伊江島カダ原半洞穴



山下洞穴の鹿骨具



大山洞穴の下顎



港川人骨(身長約154cm)



伊江島の叉状骨器

V 授業実践

1 日時 平成7年1月23日 5校時(月) 2年5組 男子21名 女子18名 計39名

2 単元名 第1章 歴史のあけぼのと日本
題材名 沖縄の縄文時代(特設授業)

3 単元について

(1) 単元目標

50億年の地球の歴史の中で人類の誕生は今から300万年前だといわれる。この短期間に(50億年の地球を沖縄の辺土岬から喜屋武岬迄の100kmに換算した場合人類300万年の道のりは60Mでしかない)人類は猿人-原人-旧人-新人と進化し人間の間たるべき直立歩行・火の使用・労働に基づいて知能を発達させた。特に道具の改良進歩は自然採集経済から農耕牧畜経済へと移行させ、その後は急速に階級社会である四大文明国家を形成して行くのである。

日本の原始社会の発展も基本的には上記の轍を踏むが現代考古学の成果は次々に新事実を提供しているのでその事も学習では明示しなければならない。例えば1万年も続いたといわれる縄文時代の最近の研究は従来からの定説を覆し、もはや縄文採集経済から弥生農耕経済へという図式は通用しなくなっている。しかし国家形成に関していえばやはり稲作に基盤をおいた弥生時代に成立過程を求めその役割と本質を理解させることが重要である

(2) 教材観

「学校教育法21条2項教科用図書以外の図書その他の教材で、有用適切なものはこれを使用することができる」この項を受けて今回は沖縄県文化課発行の「文化財にみる沖縄の自然・歴史・文化」を使用する。

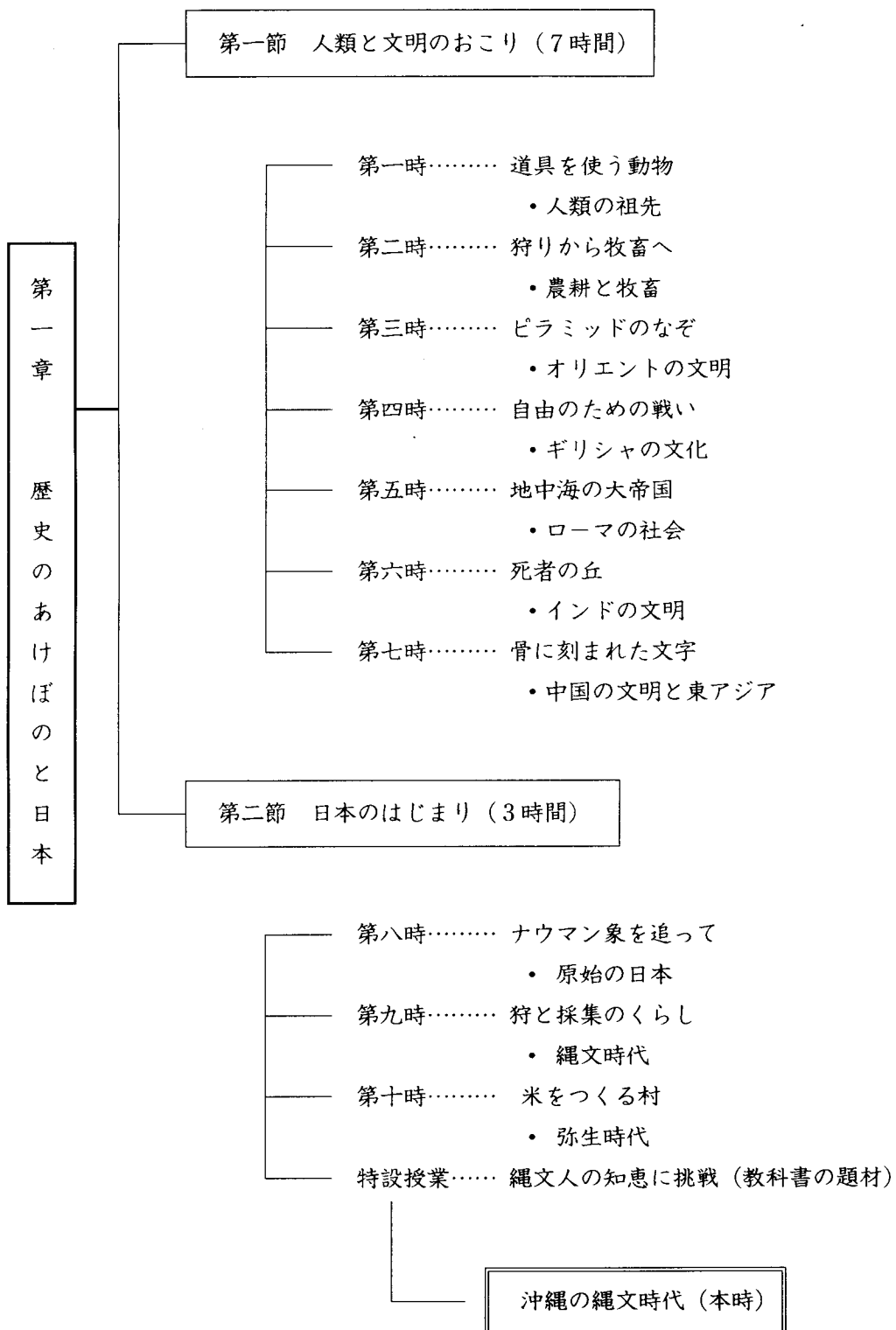
子供達は縄文土器の器形・文様・施文方法等について殆ど関心を示さないが、これらの具体的知識の習得なしでは授業が教師の一方向的な説明に終わってしまい成果はほとんど期待しがたい。

そこで自作のTPを使用することや実際に粘土に施文する方法を通して縄文土器に対する新しい発見と知識を身につければ、縄文時代の学習に対する意欲、図書館を利用するなどの自主的学習へと発展するだろう。そのために写真・図表・イラスト等多くの教材を準備する必要がある。

(3) 基礎・基本内容

- 1 南西諸島・琉球列島・南島・沖縄と呼ばれる地理空間の確認
- 2 壺・甕・鉢等の土器型式の区別
- 3 縄文時代の食料・住居への一般的理解
- 4 伊波式・荻堂式・大山式土器の器形・文様の区別
- 5 骨角器文化としての沖縄縄文文化の特性(海洋性文化)
- 6 爪形文土器・曾畑式土器発見の意義(渡具知東原遺跡)

4 単元全体の学習計画



5 生徒の学習の実態

※ アンケートによる実態調査（対象—真志喜中学校2年生5クラス174人）

- (1) 中学校一年で沖縄の地理を勉強したと思いますがあなたは沖縄の地理に興味がありますか

ある36人（21%） ない126人（72%） 無回答12人（7%）

- (2) 沖縄県の地理的特性はなんだと思いますか。

無回答72人（41%） わからない19人（11%） 特性がない10人（6%）
回答者73人（42%） ※以下は73人の延べ人数、%は174人全員に占める割合
暑い25人（14%） 暖かい21人（12%） 砂糖きび
パインの産地12人（7%） 山が少なくて低い10人（6%） 海に囲まれ
た小さい県である6人（3%） 台風が多い2人（1%） その他15人（9%）

- (3) 日本の歴史を学習している今、琉球の歴史を先史時代から現代までを通して学習したいと思いますか。

思う48人（27%） 思わない117人（67%） 無回答8人（5%） その他1人

- (4) 上の質問で「思わない」と答えた生徒に聞きます。それはなぜですか。

興味がない81人（69%） 進路が遅れる12人（9%） 高校入試にあまり出
ないから10人（9%） その他（難しいから・別に理由はない等）12人（10%）

- (5) 沖縄が初めて明国と正式に貿易をした時の宜野湾市に関係のある王様は誰ですか。

察度3人（2%） 誤答（舜天・尚巴志・英祖等）10人（6%）
知らない161人（92%）

- (6) あなたが知っている宜野湾市の遺跡・史跡・貝塚を全部上げなさい。

知らない73人（42%） 無回答12人（7%） 回答した生徒89人（51%）※以下は
89人の延べ人数、%は174人全員に占める割合
大山貝塚70人（40%） 普天間神宮37人（21%） 森の川14人（8%）
大謝名メヌカー5人（3%）

- (7) 宜野湾市の祭りが、羽衣祭りと言われている理由を書きなさい。

知らない111人（64%） 正答50人（29%） 無回答13人（7%）

- (8) あなたは今までに伊波式土器、荻堂式土器、大山式土器と言う名称を聞いた事がありますか。あるものに0印をつけて下さい。

大山式土器80人（46%） 伊波式土器12人（7%） 荻堂式土器8人（5%）

- (9) あなたは沖縄に生まれてよかったと思いますか。

思う130人 (74%)

海がきれい37人 (29%) 暖かい35人 (27%) 自分の故郷だし、何となく過
ごしやすい31人 (24%) 自然が多く残っている11人 (8%)
平和である9人 (7%) 方言など沖縄は面白い7人 (5%)

思わない22人 (13%)

22人ともほとんど意見がちがうので、特に記す事をしない。

無回答22人 (13%)

以上、大変興味深い調査結果であり、十分な分析と考察が必要であるが、それは「VI
研究の成果と今後の課題」で取り上げる事にする。ただ、郷土に対する生徒の無関心ぶ
りは、中学校生活と同時に顕在化したとも思えないので、ここで小学校の郷土学習につ
いてのアンケート調査結果も報告しておく。

- (10) 小学校の時学習した郷土の偉人名をおぼえているだけ書きなさい。

儀間真常45人 (26%) 野国総管9人 (5%) 蔡温4人 (2%) 程順則2人 (1%)
羽地朝秀2人 (1%) 察度2人 (1%) 伊波普猷2人 (1%) 尚巴志1人
謝花昇1人 仲宗根豊見親1人

学習したが覚えてない30人 (17%) 無回答75人 (43%)

- (11) 小学校6年生の社会科で琉球史を学習しましたか。

はい48人 (28%) いいえ116人 (67%) 忘れた4人 (2%) 無回答6人 (3%)

- (12) 上の質問に「はい」と答えた人に聞きます。琉球史の学習で一番印象に残っている
内容は何でしたか。※、%は「はい」と答えた48人中の割合

学習内容をおぼえてない34人 (71%) 無回答3人 (6%)

儀間真常4人 (9%) 港川人骨2人 (4%) 大山貝塚1人 (2%) 三山統一1人
黄金の宮1人 明治維新1人 (琉球処分の事か?)

昔の人々の生活や暮らし1人

6 本時の指導

(1) 本時の目標

沖縄本島と周辺離島出土の土器は、その源流が日本の縄文土器にあるが、きわめて地域性の強い伊波式・荻堂式・大山式土器を取り上げる事によって、個性的な沖縄縄文文化の成り立ちを理解させる。

(2) 観点別目標

「社会事象の興味関心」——生徒が直接的、具体的に受けとめることが出来る身近な地域の歴史学習は興味関心を持たせるうえで重要である。

(3) 授業仮説

郷土から出土する土器の器形や文様・施文方法その他の遺物の資料 (TP) を示したり、実際に自分で施文する事によって沖縄の縄文時代に対する認識を新たにするだろう。

(4) 本時の展開

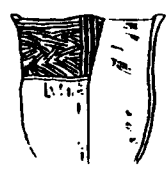
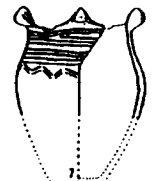
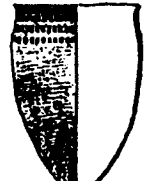
時間	学習内容と 教師の活動	予想される 生徒の活動	留意点	資料	評価の観点 ※評価の方法
導入 7分	(1) 縄文土器についての一般的理解 (質問) (2) 南西諸島の地理空間の確認 (説明) (3) 渡具知東原遺跡出土の爪形文土器・曾畑式土器発見の意義を説明する	・質問に対して答えるだろう ・ここ迄は集中して聞いているだろう	既習の内容を含むが確認の為七分	写真 編年表 空間図	興味・関心 ※観察
展開 I 8分	(1) 本読み 指名する (2) 伊波、荻堂、大山貝塚について質問 反応がない時指名	・全生徒、熱心に本に目を通すだろう ・国指定史跡を全体で答えるだろう ・立地場所、住居社について考え、発表するだろう	反応を見てからOHPを使用	貝塚の写真	意欲・態度 ※観察・発表
展開 II 20分	(3) 土器を取り上げる意義の説明 器形・文様・施文方法について様々な質	・教師の質問にグループで考えて、発表するだろう	専門用語は使わない	器形文様の写真	思考・判断力 ※話し合い 発表

展開 III 10分	問を試みてから粘土、 施文具を配布する (4) 土器の模式化 土器の見方についてわ かりやすく質問する (5) 伊波式・荻堂式・ 大山式土器の特徴 (図 案化した文様を示す) (6) 海洋性縄文文化 貝の名称を聞く 「おもろそうし」か ら謝名の海を詠んだ一 節を紹介する	・グループで実際に施 文してみる ・土器の具体的見方に ついて興味・関心を示 すだろう ・真の縄文ではないと いう発表が出て来るだ ろう ・本から名称をさがす ・干瀬・イノーについ て発表する (予習をし て来る)	幾何学 文様 本土と の交流 につい てふれ る	模式 図 文様 の図 案化 貝の 写真 干瀬 の図 縄文 遺物 の写 真	興味・関心 ※観察・発表 意欲・態度 ※観察・発表
	纏め 5分	安座間原遺跡と大山貝 塚を結びつけ大山貝塚 人の生活を想像する	・授業の感想を発表す る	安座 間原 人の 写真	知識・理解 ※観察・発表

※板書事項

沖縄の縄文時代

II 沖縄縄文土器及び文化の特性

	伊波式土器	荻堂式土器	大山式土器
土器型式			
器形	朝顔形の器形	胴上が最大径	胴の膨らみ少
文様	点を結ばない	点を結ぶ	竹べらを押し
施文具	竹を割ったもの幅5mm程の竹べら ススキ		
共通項	国指定史跡・丘陵崖下立地・海に近い・平底深鉢形の土器		

- 1 真正の縄文を欠く幾何学文様の土器 (縄文土器の変種)
- 2 九州縄文土器の影響を受けている事は間違いない (市来式土器の発見) ——本土との交流
- 3 貝塚出土の多量の魚介類・貝製品 (海洋性文化)
- 4 じゃなのよりかりしま うみちかさあもん とぎやわいよつく いぎよまたこつく

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

生徒に郷土史学習の楽しさを知ってもらうには、どのような授業形態が望ましいかを考える目的で半年間の研修に取り組んで来た。限られた時間枠の中で一年を通して生徒を引きつける事は簡単ではない。私には研修に来る前からひとつの確信のようなものがあった。時代毎に豊富な資料を準備して生徒が満足のいく「琉球史ノート」をつくる事が出来れば必ず興味・関心を持ってくれるだろうと言う事である。

沖縄の出版界は、子供達に郷土の歴史に目を向けさせ様と頑張っているが、反応は今一つの感がする。やはり学校教育において系統だった学習の蓄積がなければ、率先して出版本を読んでみようと言う意欲につながらないのではないか。

今回の研修に於ける私の最大の収穫は、資料作りの面白さにあった。その気になれば子供達が目を輝かしそうな資料はいくらでも作れるのである。資料の中には必ず代表的な遺跡の案内図も入れておきたい。出版本の案内図には分かりにくい物が多く折角、遺跡探索に出かけても、思わぬ時間の浪費をする場合がしばしばである。子供達が将来にわたって大事にとっておける様な「琉球史ノート」を是非作りたいものである。その為には教師の不断の教材研究が必要であり、研究の面白さが分かった事も収穫であった。今後、時間の許す限り、沖縄中の遺跡を巡検したいものである。

2 今後の課題

歴史学習の究極の目標は自己認識に尽きる。自分は何処から来て何処へ行こうとしているのか。自分のよってたつ故郷沖縄とは、どういう場所であり、沖縄人とはどういう人々であるのか。この自己認識、自己確立がなければ、多岐にわたる人生の問題に対処する事はむづかしい。

郷土の歴史に何の興味・関心も持たないと答えた圧倒的多数の生徒達のアンケート調査結果をどう見れば良いのだろうか。学習指導要領で地域重視が唱われている中で社会科学学習の責任は重大である。先ず小学校、中学校における一貫した年間指導計画の作成が急務であろう。系統だった学習の蓄積があって始めて生徒達は地域に積極的に目を向けるのではないか。例え沖縄の背負わされた運命が、どんな悲惨な歴史を体験していようが、それを正しく認識した時に自立の精神は生まれる。生徒達の楽しい郷土学習はそこから始まる。生徒達が自分で作った「琉球史ノート」を手に家族揃って遺跡巡りが出来たら、私の研修も少しは役に立つ事になる。

<主な参考資料>

松村瞭 「琉球萩堂貝塚」 第一書房 大山柏 「琉球伊波貝塚発掘報告」 第一書房
高宮廣衛 「先史古代の沖縄」 第一書房 「沖縄大百科事典」 沖縄タイムス社
安里進 「考古学からみた琉球史・上」 ひるぎ社
宜野湾市立教育委員会・文化課 「土に埋もれた宜野湾市」